

平成22年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ヒラメ

学名 *Paralichthys olivaceus*

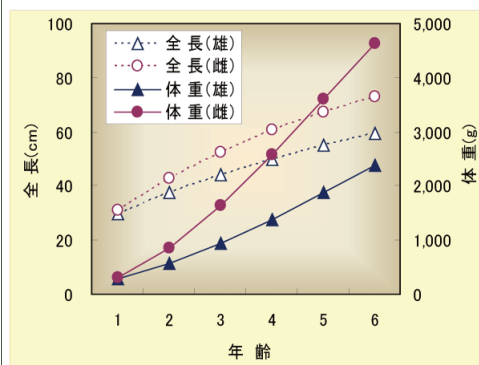
系群名 太平洋北部系群

担当水研 東北区水産研究所



生物学的特性

寿命: 雄10歳以上、雌20歳以上
成熟開始年齢: 雄2歳以上、雌3歳以上
産卵期・産卵場: 5～9月(盛期6～8月)、沿岸各地の粗砂および砂礫(水深20～50m)
索餌期・索餌場: 沿岸各地の水深30m以深の陸棚
食性: 着底稚魚はアミ類、全長10cm以上は魚類やイカ類
捕食者: 着底直後の稚魚は大型魚や甲殻類

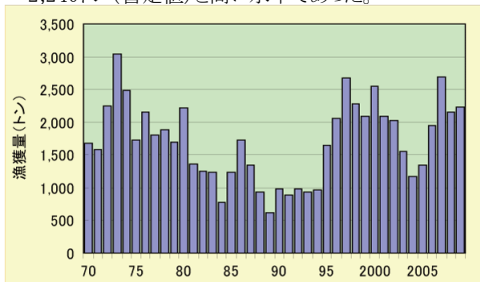


漁業の特徴

小型底びき網、刺網、定置網、沖合底びき網等により周年漁獲されている。漁法により漁獲物の体長組成は異なるが、全般的に50cm以下(1+、2+歳)が漁獲物の大半を占める。資源保護と管理を目的とした水揚げ物の全長制限(30または35cm以上)が、各県で実施されている。また、ヒラメは高級魚であり、各県において種苗放流が盛んに行われている(2008年約448万尾)。

漁獲の動向

青森県太平洋側～茨城県における1988～1994年のヒラメの漁獲量は、1,000トン弱程度で推移していたが、1995年以降は増加傾向を示し、1997年には2,674トンに達した。その後、2000年の2,542トン进行ピークに減少し、2004年は1,170トンに落ち込んだ。2005年から再び増加し、2007年は2,699トンであった。2008年は2,153トン、2009年は2,240トン(暫定値)と高い水準であった。

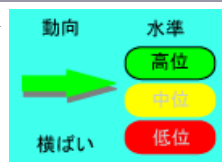


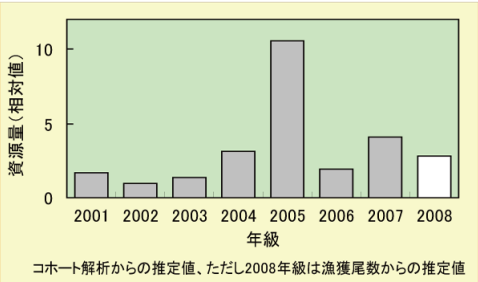
資源評価法

1990～2002漁獲年度(7月～翌年6月)は、複数年にわたり採集した標本を用いて作成したage-length keyを用い、また、2003～2008漁獲年度は半年ごとに作成したage-length keyを用いて、福島県(1990～2008漁獲年度)の水揚げデータより雌雄別年齢別漁獲尾数を算定した。この値を系群全体に引き延ばし、雌雄別のコホート解析を行い、雌雄別年齢別の資源尾数を推定した。

資源状態

1980年代後半～1990年代前半に低水準であった資源量は、1994年と1995年に発生した卓越年級により急増した。その後、2000年級までの年級群豊度は高い水準を維持していた。2000年級以降の年級群豊度は減少し、2002年級が最低となった。2005年級の豊度は1990年代の2回の卓越年級と同レベルであると推察された。このため2006年の資源量は1990年代以降の最高水準であった。2006、2007年級の豊度は、それぞれ中、高程度であり、2007、2008年の資源量は2006年度よりは減少したものの高い水準であった。2008漁獲年度の資源量は過去19年の中で高位水準であった。2004～2008漁獲年度の資源量は、2006年度まで増加しその後減少したことから、横ばいで推移したと判断した。





管理方策

現在(2008漁獲年度)の資源量は高位水準であり、産卵親魚量も1990年度以降最高の水準にある。これは、卓越年級であった2005年級の高い豊度に依存している。ヒラメの資源量は2006年度以降減少しているが、現在の漁獲圧を維持しても、当面は1990年以降の平均的なレベルを維持できると考えられる。したがって、 F_{limit} として $F_{current}$ を、 F_{target} として $0.8 \times F_{current}$ を用いてABCを算出した。また漁獲物の全長制限は、親魚量の維持と資源の有効利用の観点から重要であると考えられるが、再放流後の生残率を評価する必要がある。

	2011年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	1,340トン	$F_{current}$	0.70	44%
ABCTarget	1,150トン	$0.8F_{current}$	0.56	38%

- 10トン未満を四捨五入
- ABC、F、漁獲割合は漁獲年度(7月～翌年6月)の値である
- $F_{current}$ は2008漁獲年度の漁獲係数である

資源評価のまとめ

- 近年の資源水準は高位、動向は横ばい傾向である
- 最近5年間の年級群豊度は、2003年級より順に、低位、中位、高位(卓越)、中位、高位であった

管理方策のまとめ

- 資源量を1990年度以降の平均的なレベルに維持するために、漁獲圧を現状程度にする
- 水揚げ物の全長制限を今後も維持する

執筆者: 栗田 豊・上原伸二・伊藤正木

資源評価は毎年更新されます。